

■大久保利通 政治家。〈明治維新〉期の絡み合う多数の人材のなか、一つの軸になり、近代日本の船出を実現させた。

おおくぼとしみち

富籤流行・1830＝ 鹿兒島城下高麗町で、薩摩藩士大久保利世の長男に生まれる。

父も祖父も開明的な人であった。

大塩平八郎乱1837＝ 7歳：

蚕社の獄・1839＝ 9歳：

郷中で3つ上の西郷隆盛と共に学ぶ。

阿部正弘首座1845＝15歳：

孝明天皇・1846＝16歳：藩記録所に出仕。

・・・・・・1848＝18歳：

国定忠治疎・1850＝20歳：父が高崎くずれに連座して免職・遠島になり、利通も免職謹慎となるが、

尊徳報徳論・1851＝21歳：島津斉彬が藩主になると、謹慎を解かれ復職し、

ペリー来航・1853＝23歳：蔵役となる。

開国開港・1854＝24歳：開国後の緊迫した世情をうけて、薩摩藩尊王攘夷グループ(のちの精忠組)の結集が始まり、やがてそのリーダーとなる。

蕃書調所・1857＝27歳：早崎満寿子と結婚。徒目付となる。

五ヶ国条約・1858＝28歳：斉彬が没し、久光が実権を握り、消極的になったため、同志40余人と{精忠組}を結成。

安政の大獄・1859＝29歳：\*同志の大老井伊直弼襲撃計画を逆手に久光を介して藩主を論し、これを契機に久光の信頼を得て、

桜田門外変・1860＝30歳：

遣欧使節・1861＝31歳：側近に抜擢され、尊攘論から公武合体論に転向。

生麦事件・1862＝32歳：久光の公武合体・幕政改革の運動に参画。西郷隆盛と死をはかるほどであったが、一橋慶喜を將軍後見職に、松平慶永を政事総裁職につけるのに成功し、その名を広く天下に知られるようになる。

8月18日政変 1863＝33歳：海難にあったが九死に一生を得た。

禁門の変・1864＝34歳：参預会議の決裂で幕薩関係が悪化すると、

薩長同盟・1866＝36歳：西郷隆盛と組んで、長州再征反対、薩長連合を結び、徳川慶喜將軍職就任妨害、兵庫開港4侯会議画策など多面的な反幕政治活動を展開して幕府を追い詰め、

明治維新・1868＝38歳：\*岩倉具視と提携して王政復古クーデタを敢行、明治維新政府を発足させ、その中枢にあって参与、内国事務掛、総裁局顧問、鎮将府参与を歴任し、政権の基礎固めにあたる。木戸孝允と版籍奉還を推進し、

戊辰戦争終・1869＝39歳：\*実現、諸藩領有権を政府に統合。同年、参議、従三位賞典禄1800石をうける。

廃藩置県・1871＝41歳：政府部内で木戸派と対立が激化、対抗して鹿兒島にいた西郷を政府に迎え入れ、大蔵卿に転任。西郷の指導力のもと廃藩置県が断行され、政府は名実ともに全日本を統治下におくことになった。廃藩後の重要課題は条約改正であったが、その実現に野心をもやす肥前派の参議大隈重信に外交上の実権が移るのを阻むねらいで、岩倉使節団を組織し全権副使に就任、アメリカ、ヨーロッパ各国訪問に出発。

明治6年政変 1873＝43歳：条約改正を実現できず、失意のうちに帰国。勢力挽回をはかって、参議に返り咲くと、官廷陰謀を駆使して西郷大使朝鮮派遣計画を葬り、留守政府派参議の追い出しに成功し(明治6年政変)、初代内務卿を兼任、以後、いわゆる大久保独裁(有司専制)の時期に入る。

佐賀の乱・1874＝44歳：佐賀の乱鎮定の全権を帯び、つづいて台湾出兵の後始末のため全権弁理大臣となって北京に赴き、清国側全権との間に“日清両国間互換條款及互換憑單”を締結、日本の琉球領有が国際的に承認される。

初の民間工場1875＝45歳：大阪会議で木戸、板垣退助と妥協し、漸進的に立憲政治に移行する方針をうちだし、地租改正事務局総裁や内国勸業博覧会総裁などを兼ね、殖産興業にも心をかたむける。

三つの反乱・1876＝46歳：各地で土族反乱がおきると、地租を軽減して不平士族と農民のむすびつきを防ぎ、

西南戦争・1877＝47歳：西南戦争を積極的に鎮定した後、地方官会議を開き、郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則の三大案を議定。鎮定の反動として、

大久保暗殺・1878＝48歳：\*東京紀尾井坂で石川県士族島田一郎ら6名に暗殺された。

公平無私であり、説得力が極めて強かった。明治維新時にはすぐれた人材が次々と登場するが、軸となった大久保の存在がなければ、失敗するような危機が何度もあった。また、維新後の体制を確立を成し遂げた直後に暗殺されたが、その死が少しでも早ければ、反動勢力の復活もあり得たという点で、半ば奇跡的である。大久保自身は藩の問題を全く超えており、肥前の大隈重信、長州の伊藤博文、土佐の岩崎弥太郎など、以後の日本を担う人材は皆、彼を尊敬していた。